

動注併用で口腔内放射線療法を受けた患者の説明に対する捉え

キーワード：口腔内悪性腫瘍 治療 副作用 説明

2階東病棟

○ 中川 美枝 清藤 真由 松岡 愛乃 安藤 千恵
小原 美和 原田 千枝 水間 美智子

I. はじめに

口腔内悪性腫瘍患者は、治療前は疼痛や機能障害が少ない。しかし、動注による化学療法併用での放射線療法を開始すると、口内炎が出現し、激しい疼痛や経口摂取困難、コミュニケーション障害を生じ、身体的・精神的な苦痛を経験する。その上、その他の副作用も相まってセルフケアが低下し、QOLの大きな低下も招くこともある。そのような患者を前に看護師は、関わりに戸惑い、治療の説明が充分に行えていないと感じている。そのため、説明に対する患者の捉えを知り、患者の目安となるような資料を作成したいと考えた。

そこで今回、化学放射線療法を受けた患者の、入院中の説明に対する捉えについて研究したので報告する。

II. 研究方法

1. 対象

口腔内悪性腫瘍患者 9名

2. 研究期間

2004年7月～同年9月

3. データ収集、分析方法

半構成的インタビューガイドに基づいた面接、KJ法にて分析

III. 倫理的配慮

研究目的、内容を対象者に口頭と紙面で説明し同意を得た。そして面接は個室で実施した。また、情報は終始匿名とし、情報は研究員間のみで共有し施錠できる場所に保管し、研究終了後は処分した。

IV. 結果

説明に対する捉えは、【情報不足】【医療者による相違】【知ることへの疑問】【納得】から構成されていた。また、【おまかせ】【あきらめ】【疑い】【遠慮】という、医療に対する捉えが明らかとなった。

V. 考察

今回は【情報不足】【知ることへの疑問】について述べる。

1. 情報不足

1) 痛み体験とのギャップ

患者より「こんなに痛くなるとは思わなかった」という言葉が多く聞かれた。一般に「口内炎」と聞いて想像するのは、舌や頬粘膜に数個できるものであろう。しかし実際は口腔内全体にアフタを生じ、激しい疼痛を伴うため、治療前の説明で描いた「痛みのイメージ」と実際の「痛み体験」にギャップが生じたと考えられる。井部らは、「不完全で不正確な情報は痛み体験に悪影響を及ぼし、痛みの予期段階における不安の程度にも影響する。一般的に不安が激しければ激しいほど、反応も大きいとされる。¹⁾」と指摘している。このことから口内炎や疼痛に対して予測がつかないこ

とへの不安による疼痛の増強を防ぐことが重要である。そして、疼痛の成り行きや疼痛管理、日常生活での注意点などに関して具体的に説明する必要があると考える。

2) 治療の自己中断

患者は内服などの必要性について疑問を抱いていた。当病棟では、患者は口内炎に伴う疼痛のため、内服や咳嗽を自己中断することが多い。岡崎は「情報の欠如や、間違った不十分な情報を患者に提供することは、患者からの処置やケアなどについての正しい決定を下す権利を奪うことになる²⁾」と指摘している。医療者は効果的な治療参加や、副作用の予防行動の動機付けを促し、よりよい選択の糧となるような説明を行うことが重要であると考えられる。

3) 鎮痛剤に対する独自の考え

患者より「やっぱり痛み止めは、あまり使わないほうがいい?」「できるだけ弱いものを利用していた」という言葉が聞かれた。これは、患者の中に「鎮痛剤は使いすぎると良くない」といった認識があり、疼痛を我慢し、鎮痛剤の使用を制限していたためと考えられる。そのため、患者の鎮痛剤に関する認識や経験を知り、その患者にとって最良の疼痛管理を実施できるような説明を行うことが重要である。

2. 知ることへの疑問

患者は「知りすぎてどうだろう」、「病名と治療方法をはっきり言ってくれたら、あとはベルトコンベアーに乗っていった方が楽だったのか」という、治療や経過、副作用について知ることへの疑問と葛藤を表した。これらの言葉には、本研究で明らかとなった患者の【おまかせ】【あきらめ】【疑い】という医療に対する捉えが関与していると考えられる。また、石崎らは「(患者は)治療方法について医師から詳しい説明を望み、治療方法の最終決定を医師に委ねる」と指摘している。必要な説明を行ったうえで、その患者の理解や反応を把握し、支援することが大切であると考えられる。

VI. おわりに

本研究で、患者は治療や副作用についてさまざまな捉えをしていることが分かった。中でも副作用に伴う疼痛に対して、自らの体験と比較し、説明との違いを感じていた。そして医療者は、必要な情報を提供したうえで、患者の捉えとそれに関与する認識を理解し、効果的な治療参加を促進できるような説明が必要であると感じた。

引用・参考文献

- 1) 井部俊子：臨床看護総論 第2版，医学書院，141，1997.
- 2) 岡崎寿美子：ケアの質を高める看護倫理-ジレンマを解決するために，医歯薬出版，19，2003.
- 3) 石崎達郎他：治療方法決定における受療者の参加意識，医学の歩み，166(7-8)，585-586，1993.

〔平成17年10月17・18日 第36回日本看護学会 成人看護I（新潟）にて口頭発表〕